

平成30年9月15日現在

機関番号：32681

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370336

研究課題名(和文) ユダヤ系アメリカ文学に於けるイスラエル表象と平和のレトリックの考察

研究課題名(英文) Representation of Israel and a Rhetoric of Peace in Jewish American Literature

研究代表者

相原 優子 (Aihara, Yuko)

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：30409396

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：ユダヤ系アメリカ文学におけるイスラエル表象および、ユダヤ系アメリカ人作家の作品特有の平和のレトリックを考察した。主にソール・ベローの作品に多くの時間を費やすことになった。研究成果としては、論文3本を執筆したことが挙げられる。最初の1本「ビリー・ローズ『記憶』を問う」については、発表した学会誌『Soundings』に於いてその年の優秀論文賞である刈田賞を受賞した。3本目に執筆した論文「鉛とシクラメン：『学生部長の十二月』における弱さの考察」で展開したテキスト分析に於いては、このテーマの考察を続ける中で、次の新たなテーマへと繋がるものとなった。

研究成果の概要(英文)：I focused my study on the representation of Israel in Jewish American Literature, and how these literary works managed to come up with their original rhetoric of peace. I mainly analyzed works by Saul Bellow, one of the most important Jewish American writers of the 20th century. I wrote and published three papers. For the first paper I published titled "Billy Rose Questions 'Memory': Saul Bellow's 'The Bellarosa Connection'" in the journal 'Soundings', I was awarded the Karita Prize, which is given to the best academic paper published in that journal of that year. As for the last paper titled "Cyclamen and Lead: A Study of 'Weakness' in Saul Bellow's The Dean's December," I explored the theme of "weakness," which shed a new light on Bellow's latter work, which will hopefully open up a new discussion on the topic of rhetoric of peace in Jewish American Literature.

研究分野：ユダヤ系アメリカ文学

キーワード：ソール・ベロー シンシア・オジック グレース・ペイリー ユダヤ系アメリカ文学

1. 研究開始当初の背景

現代ユダヤ系アメリカ文学の主要なテーマとして、ユダヤ系の人々にとって最も重要な歴史的出来事であるホロコーストを取り上げる研究は多い。しかしながら、現代のユダヤ人を巡る世界的情勢、政治的状況を鑑みる時、もはやイスラエル・パレスチナ問題を無視することは出来ない。文学研究に於いても、当然この問題を研究の範疇に捉える必要がある。しかしながら、ホロコーストのテーマに比べて、このイスラエル・パレスチナ問題をユダヤ系アメリカ文学のテーマとして十分掘り下げた研究は未だ少ない。特にイスラエルに暮らす当事者のユダヤ人ではなく、遠く離れた地に暮らすユダヤ系アメリカ人がこの問題をどのように捉えているか、それが文学テキストに如何に反映されているかを考察することは、ユダヤ系アメリカ文学研究にとっても有意義であると考えた。イスラエル・パレスチナ問題を独立したテーマとして捉えるよりは、むしろ、ホロコーストの延長線上にあるテーマとして位置づける必要があることを認識し、その視点からユダヤ系アメリカ文学作品を分析したとき、ユダヤ系アメリカ文学研究の新しい側面が見い出せるのではないかと考えた。またそうすることによって、ユダヤ系アメリカ文学研究の今日的意義を再確認することができると考えた。

2. 研究の目的

ホロコーストについても、イスラエル・パレスチナ問題についても、多くのユダヤ系アメリカ人作家は、直に悲劇や困難を経てきた体験者ではないという理由から、当事者としての視点で語ることは許されてこなかった。しかし、当然のことながら、アメリカ在住ではあってもユダヤ系作家であれば、ホロコースト同様に、イスラエル・パレスチナ問題のテーマはいつか文学作品の中で扱わなくてはならない道義的責任がある、と感じていることは確かである。一方で、当事者ではなく、遠い地の安全な場所で安易に「和平」の提言や反イスラエルの意見を述べるのが、如何にユダヤ系アメリカ人にとってリスクの高いことか、様々な事例が証明している。(ある大学教員はそのイスラエル批判により大学の職を追われている。)そのようなことから、ユダヤ系アメリカ人作家の多くは表だってこのテーマを作品の中で扱ってこなかった。しかしながら、ホロコーストの場合と同様に、それぞれの作家特有のレトリックを用いてこのテーマを作品の中で展開してきたのではないかと考えられる。ユダヤ系アメリカ人作家たちが駆使した文学レトリックを詳細に検討することで、イスラエル在住ではないが故に提示できる考え、延いては平和への提言があるのではないかと考えた。本研究は、この隠れたメッセージをアメリカの主要なユダヤ系作家の作品のテキストから読み取することを目的とした。現代ユダヤ系ア

リカ文学に於けるイスラエル・パレスチナ問題を掘り下げることで、改めてその射程からホロコーストのテーマを捉え直し、イスラエル人作家とはまた違うユダヤ系アメリカ人作家特有の平和のレトリックが見いだせると確信したからである。

3. 研究の方法

1) 研究の方法としては、まず基本軸として、二十世紀最も重要なユダヤ系アメリカ人作家であるソール・ベロー(Saul Bellow, 1915-2005)の作品分析を中心に据えた。ソール・ベローは、イスラエル・パレスチナ問題が勃発した際、いち早くこの問題にアメリカ在住のユダヤ系作家として発言している。また、ベローは、このイスラエル・パレスチナ問題について、彼自身の手による唯一のノンフィクション作品である *To Jerusalem and Back* (1976)を公表している。それ以降は不思議なほどこの問題への表立った政治的発言を控えており、また作品についてもその視点で論じられることはなかった。そういう意味に於いても、その当時のユダヤ系作家の典型的な反応の一例としてベローを基本軸に据えることにした。

2) その上で、新たな平和の提言という側面を考察する為には、女性の視点も不可欠であると考えた。特にユダヤ系アメリカ文学は男性作家主流のジャンルと見なされることが多いだけに、この問題について女性作家の視点も取り入れることは必須であると考えた。まずは、比較的親イスラエル発言を表明している女性作家シンシア・オジック(Cynthia Ozick, 1928-)の作品も研究対象に含めることにした。特に彼女の政治的発言の明快さとは反比例するかのように、彼女の作品テキストは難解である。その難解なテキストを中心に分析し、彼女の発言と彼女の作品がリンクするのかどうかを確認したいと思った。

3) そして、もう一人、女性作家グレース・ペイリー(Grace Paley, 1922-2007)の作品も研究対象に含めた。彼女はオジックとは反対に明確にディアスポラの意義を表明した作家である。また、彼女の作品を「環境文学」的視点を適用して分析し、彼女独自の「平和のレトリック」を読み取ることができるのではないかと思い、その視点から彼女の作品を再検討する必要があると思った。

4) 作品の分析に加えて、イスラエル・パレスチナ問題、シオニズム、ホロコーストに関する文献収集と考察も進めた。

4. 研究成果

結果的に、基本軸となるソール・ベローの作品の分析に殆どの時間が費やされることになった。研究成果としては、ベローの作品を分析した論文3本である。ベローの初期、中

期、後期の作品の考察を通して、ペロー作品全体を改めて概観する形となった。

1) 1本目として発表した論文は「ビリー・ローズ「記憶」を問う：The Bellarosa Connection 再読」(Soundings 第40号, 2014年)である。これは、ペロー後期中編作品であるThe Bellarosa Connection (1989)を「記憶」というテーマから分析したものである。この作品にはホロコーストを生き延びたヨーロッパ系ユダヤ人、ホロコーストを知らずに育ったユダヤ系アメリカ人が登場することから、元来ずっとホロコースト文学の文脈の中で論じられてきた。しかし、作品の後半では重要な出来事の舞台がイスラエルで展開していることから、この作品におけるイスラエルのもつ意味を問う必要があることに気付いた。実在の人物で、伝説的な興行師であるビリー・ローズの描かれ方をどう捉えるかが、この作品理解のポイントとなる。この作品では、戦時中、ホロコーストを逃れたユダヤ人のために、身分を隠したまま救済活動を展開していた、という全くフィクションの経歴がビリー・ローズに与えられる。実在の人物に全くフィクションの経歴を与えるその突飛な発想の意味、またその自らの隠れた「偉業」を決して表立って認めようとしないうビリー・ローズの態度の謎などを考察した。考察の結果、興味深いことに、中編小説という短さにも係わらず、この作品ではホロコーストと未だ解決をみないイスラエル・パレスチナ問題が巧妙に結びつけられていることが分かった。またホロコーストの「記憶」が常にイスラエル建国の免罪符として機能していたことを、ビリー・ローズが決して自分の隠れた偉業を認めようとしないう姿、まさに「記憶」を拒絶する態度を通してペローが描いているのではないかと論じた。この論文については学会誌Soundingsに於けるその年の優秀な論文に与えられる刈田賞を受賞した。

2) 次に発表した論文は「他者と出逢う街ニューヨーク：ソール・ペロー『犠牲者』再読」(田中正之編『ニューヨーク：錯乱する都市の夢と現実』、竹林舎、2017所収)である。この論文に於いては、ペローの初期の作品The Victim (1947)を「他者」というキーワードから分析した。第二次世界大戦が終結した2年後に発表されたこの作品は、その当時のユダヤの状況を極めてよく反映している。亡命ユダヤ人が満ちあふれるニューヨークというトポスに焦点を宛て「他者」という概念、特にレヴィナスの「他者論」を用いて分析を行った。この小説はユダヤ系の主人公が過去の一時期に顔見知りであったワスプの男性に身に覚えのない罪を告発され、執拗に追及されるという話である。二人の男性の息詰まる攻防戦を描いたこの作品は、従来、アメリカ社会に於けるワスプ対ユダヤ系の対

決という観点で論じられてきた。確かにその側面はあるものの、「加害者」対「被害者」というような単純な二項対立を当てはめてしまうと、この二人の関係の複雑さを単純化してしまう恐れがある。と、いうのも、この執拗な告発者の追及と格闘するプロセスのなかで、主人公のユダヤ系男性は今までとは違う自分に生まれ変わってきていることを発見していく。今まで消極的に生きてきたこのユダヤ系主人公は、告発者との攻防戦を通して徐々に人生に対して積極的になっていく。このような効果をもたらす不気味な告発者と主人公の関係をどのように捉えるかが、この作品理解のポイントである。レヴィナスの他者論の根幹を成す「他者」と「応答」という二つの概念を援用することによって、この作品が試みようとしていたのが「主体」という概念の問い直しであることが明らかになった。そもそも「主体」とはなにか。「主体」は当人の意志によってそのまま形成されるものではなく、「他者」による呼びかけに「応答」して初めて立ち上がるものである。この論文では、新たな「主体」が立ち上がるまでのプロセスを描いた作品としてThe Victimを捉え直した。更に終戦から2年後に発表されたということもあり、表立った描写はないものの、作品の題名からも推察されるようにこの作品にはホロコーストのテーマがテキストに埋め込まれている。作品に編み込まれたホロコーストのテーマに新たな「主体」という概念を当てはめてみたとき、ホロコースト時におけるユダヤ民族の「主体性」という問題へと繋がっていくことに気付かされる。ホロコーストに於いては常に「犠牲者」「被害者」として描かれてきたユダヤ民族は、当然ながら同情されるべき存在として見なされてきた一方で、皮肉にもその「主体性」の無さ、その「弱さ」を揶揄されてきた。ペローは今まで無自覚に使用されてきた「主体」という概念を二人の男性の攻防戦を通して改めて問い直し、「体験者」ではないユダヤ人作家として、ペローなりのホロコースト文学を描いたとも言えるのである。また、その延長線上にあるイスラエル・パレスチナ問題は、まさに「他者」への「応答」を巡る問題であることから、この問題を考える上で、示唆を与える作品でもあることが確認出来た。

3) 3本目の論文は「鉛とシクラメン：『学生部長の十二月』における弱さの考察」(日本ソール・ペロー協会編『彷徨える魂たちの行方：ソール・ペロー後期作品論集』、彩流社、2017所収)である。この論文は、ペロー中期から後期への橋渡しの位置づけにある作品The Dean's December (1982)を「弱さ」という観点から論じたものである。この論文では、作品で扱われる「環境問題」、特にアメリカでは極めて深刻な「鉛害」というモチーフに焦点をあてた。主人公の学生部長は、

義母を見舞うためにブカレストに滞在している。その地で自分の暮らすシカゴの街の荒廃、また自分が巻き込まれている様々な問題に思いを巡らせている。その学生部長は、全く畑違いの分野の科学者からアメリカ社会における「鉛被害」の研究を手伝ってほしい、との要請を受ける。このエピソードは、作品の最初から最後までずっと言及され続けているにも関わらず、従来の研究では、このモチーフの十分な意義が考察されずにきた。主人公の学生部長がこの調査に協力するのかしないのか、なかなか最後まで明らかにしない、というペローの戦略からみても、このモチーフがこの作品のある種の促進剤として機能していることは明らかである。「環境問題」という側面から作品を眺めることで明らかになるのは、ペローの文学的関心の変化である。今まで哲学的思考や魂の問題に関心を寄せていたペローがこの作品では人間の「身体」、それも「弱い」「傷つけられた」身体に関心を示していることが分かる。また、この身体への関心は作品のテーマだけではなく、新たな文学的ジャンルへの関心としても読み替えることが出来る。ペローはこの作品を何度も「奇妙な」作品であると語っていることから、ペロー自身がこの作品にて何か新たな文学形態に挑戦していることが示唆されている。現代の問題を捉えるには今までの文学形態では不可能である、とペローは考えているかのようなのである。「環境問題」、特に「鉛被害」という公害のモチーフはこの作品の顕著な二つのテーマを映し出す。一つは「弱さ」というテーマである。初期から中期にかけて、ペローの作品の最大の特徴はその活力とエネルギーであった。そのペローが中期以降の作品では「弱さ」、むしろ「弱さ」の先にある「強さ」に目を向けていることが分かる。もう一つのテーマは、「繋がり」である。環境問題ほど人間が独立した一個の存在ではなく、生物、無生物の生命の網の中で、他の生物に依存して、その「繋がり」の中で棲息している「弱い」存在であることを示すものはない。そういう意味に於いて、中期から後期にさしかかるペローは新たな文学テーマと文学形態の実験としてこの作品を描いたことを論証した。ペロー作品に見られる「身体」や「弱さ」は、イスラエル・パレスチナ問題も含めて、「力」や「暴力」が蔓延る社会の中で、人間を結びつける共通基盤として新たな「力」として捉えられるのではないかと、という示唆を含めて論じた。

4) ソール・ペロー作品の中で是非分析研究を行いたいと考えていた *Mr. Sammler's Planet* (1970) については、ホロコーストのテーマは見いだせるものの、イスラエル・パレスチナ問題との関係性については、もう少し検討が必要であると感じている。また、当初、シンシア・オジックとグレース・ペイリーの作品も研究対象に含めていたが、ペロー

作品の研究に大幅な時間を費やした為に、この二人の女性作家研究については、期間内に十分な成果を出すことが出来なかった。シンシア・オジックの作品については、特に *The Puttermesser Papers* (1997) の分析をすでに開始している。この作品は、Ruth Puttermesser という女性主人公の登場する物語を集めた連作短編集という形態のものである。全体的に大変ユダヤ色の強い作品群ではあるが、この作品に見られるイスラエル・パレスチナ問題は、むしろこの作品の最もユダヤ色のない章で扱われていると思われる。その分析を進めるにはオジックが言及するイギリスの女流作家の作品の研究が必要となり、その著作や文献の分析に予想以上に時間がかかっている。しかしながら、近日中にこの作品についても論文を執筆する予定である。また、グレース・ペイリーの作品についても、期間内に十分な成果が出ることが出来なかったものの、彼女の短編とペローの短編の比較研究を開始し、論文を執筆する予定となっている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

1) 相原優子「ビリー・ローズ「記憶」を問う：*The Bellarosa Connection*再読」査読有り、*Soundings*、40号、2014年、125-145頁。

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計2件)

1) 共著：日本ソール・ペロー協会編『彷徨える魂たちの行方：ソール・ペロー後期作品論集』、彩流社、2017、総頁数353頁。(担当章：第二章：相原優子「鉛とシクラメン：『学生部長の十二月』における弱さの考察」23-47頁)

2) 共著：田中正之編『ニューヨーク：錯乱する都市の夢と現実』、竹林舎、2017、総頁数：502頁。(担当章：相原優子「他者と出会う街ニューヨーク：ソール・ペロー『犠牲者』再読」100-118頁)

6. 研究組織

(1) 研究代表者 相原優子(AIHARA, Yuko) 武蔵野美術大学・造形学部言語文化研究室・教授
研究者番号：30409396

(2) 研究分担者 なし